

寄稿

稀代きだいの名参謀、最後の使命。
父は子に何を残せるか

黒田くろだ官兵衛かんべえ

黒田官兵衛「くろだかんべえ」
天文十五年（慶長九年）（一五四
六～一六〇四）。戦国期の武将。
実名孝高、号に如水。播磨の小
領主の家臣の家に生まれる。豊
臣秀吉に仕え、天下統一に尽力
する。関ヶ原合戦時は隠居の身
ながら、独自に九州地方を席卷。



著者

株式会社 ことほぎ
代表 白駒 妃登美氏

埼玉県生まれ、福岡県在住。
慶應義塾大学卒業後、大手航空会社の国際線乗務員として7年半勤務。

結婚、出産、そして大病を経験し、命を紡ぐことの大切さを感じて、結婚コンサルタントとして活動を始める。2012年、日本の歴史や文化の素晴らしさを国内外に向け広く発信する「株式会社ことほぎ」を設立。全国各地で開催される歴史講座は、「歴史が嫌いな人でも、歴史を好きになってしまう」と好評を博している。著書に『人生に悩んだら「日本史」に聞こう』（共著、祥伝社）がある。

時流を読む能力とその過信

「今こそ千載一遇のチャンス！」

京都の本能寺で織田信長が明智光秀に討たれたという報に接した時、驚きと悲しみで慟哭する豊臣秀吉の傍らで、側近の黒田官兵衛の直

感は、冴えわたりました。織田方の諸将が、大将の信長を失い、窮地に陥ったと焦る中、官兵衛の目には、未来に向かって秀吉の運が大きく開けていくのが、はつきりと見えたはずでした。

官兵衛が進言した通り、交戦中だった毛利氏と急ぎ和睦した秀吉は、「中国大返し」を実行します。備中国高松城（現在の岡山県岡山市）から山城国山崎（現在の京都府乙訓郡大山崎町）までの約二百キロメートルを、二万を超える大軍がわずか十日で踏破するという離れ業を演じ、見事主君の仇を討つと、やがて関白となり天下を統一し、栄華を極めていきました。官兵衛の時流を見る目の確かさは、その後の歴史が実証しているのです。

黒田官兵衛は、歴史上、秀吉の参謀として知られ、高松城水攻め、中国大返し、山崎の合戦、賤ヶ岳の戦い、四国攻め、九州平定と、秀吉の天下獲りの陰には、常に官兵衛の戦略・戦術上の的確な助言があったといわれています。

しかし、官兵衛ははじめから秀吉や信長に仕えていたわけではなく、もともとは小寺氏の家老として、姫路城を守っていました。

小寺氏を含め、播磨（現在の兵庫県の一部）の小大名たちは、東に織田、西に毛利という二つの大勢力に挟まれ、難しい舵取りを迫られます。彼らのほとんどは、どちらにつくか決めかね、状況に流されて織田にいたり毛利にいたりして、旗幟を鮮明にできずにいましたが、早いうちから信長の才能を高く評価し、その将来性を見抜いた官兵衛は、主君の小寺政職に信長に臣従するようにアドバイス。

その後の歴史を見れば、官兵衛の読みが見事に的中したことがわかります。これ以降、信長の意を受けて秀吉の与力となった官兵衛は、地方の小大名の家老という埋もれた存在から、一躍、秀吉の天下獲りの名参謀として、歴史の表舞台に躍り出たのです。

時流を見る目が確かなだけでなく、外交や交渉術にも長け、その上、寡少な兵力で何度も大軍を破ったほどの戦上手。戦国武将としての官兵衛には、さしあたって欠点は見あたりません。

唯一の欠点を挙げるとすれば、自分の才能に絶対的な自信を持ち、自分の尺度で人を推し量ってしまうところでしょうか。若い頃、官兵衛



天正5年9月6日付織田信長朱印状(福岡市博物館蔵)

織田と結んだ黒田官兵衛に対し、中国攻め大将の羽柴(豊臣)秀吉に従うよう指示をしている。



天正5年7月23日付羽柴秀吉自筆書状(福岡市博物館蔵)

織田勢中国方面司令官当時の秀吉からの手紙。官兵衛を秀吉の実弟である秀長同様に信頼する旨が記され、親密な関係がうかがえる。

は、この欠点が災いして、危うく命を落としかけたことがあります。

織田家の重臣で摂津(現在の大阪府と兵庫県の一部)の支配を任されていた荒木村重が、信長に對して謀反を起こし、有岡城に籠城した時のこと。官兵衛の主君・小寺政職が、家老である官兵衛に何の相談もなく、村重に呼応してしまったことで、官兵衛は窮地に立たされます。

信長と政職の間で板挟みになった官兵衛は、村重を思いとどまらせるべく、単身、有岡城に乗り込みました。官兵衛の目には、謀反が到底成功するとは思えず、理を持って論せば、村重を説得できると思ったのでしょう。自分には、村重を翻意(ほんい)させるだけの状況判断力と説得力があると、絶対の自信を持っていたのではないでしょうか。

けれども、人はみな、官兵衛と同じように的確な判断ができるわけではないのです。人の心を動かしているのは、理屈ではないということを、有岡城で官兵衛は思い知らされることとなります。

なんと村重は、官兵衛に会おうともせずに、城内の牢に幽閉してしまったのです。こうなつては、

状況判断力や説得力といった官兵衛の類いまれなる才能も、宝の持ち腐れ。官兵衛は、最大の武器を封じられたまま、空しく時を過ごすほかありませんでした。

荒木方の籠城戦は、官兵衛を牢に閉じ込めたまま、その後一年近くも続きました。しかし、ついに有岡城が落城。その混乱にまぎれて城内に潜入した官兵衛の家臣が、衰弱しきつた官兵衛を発見、助け出したのです。

一年近くもの間、日のあたらない狭い地下牢で、足を伸ばすこともできずに暮らした官兵衛。救出された時、彼は、肉が落ちて別人のように痩せ細り、皮膚病を患い、髪は半分以上も抜け落ちていました。さらに、足腰が立たない状態で、生きてるのが不思議なほどでした。

官兵衛の肉体のダメージは深刻で、その後、体調は回復しても、片足は伸びないままで、いつも片足を引きずっていたそうです。

しかし、官兵衛の苦難はそれで終わりではありません。

官兵衛は、これほどまでにひどい目に遭わされても、信長に対して忠節を貫いたのですが、当の

信長は、村重説得に向かった官兵衛が戻ってこないで、官兵衛が自分を裏切り、荒木方に寝返ったと早々に判断しました。そして、人質としてあずかっていた官兵衛の一人息子・松寿丸を殺すように命じたのです。

官兵衛が変わり果てた姿で有岡城から救出された時、信長は、官兵衛の忠義の深さを知り、感激します。と同時に、早まって松寿丸を殺させてしまったことを悔みました。

ところが……松寿丸は生きていたのです。

「官兵衛にかぎって、裏切るわけがない」

と信じた男が、松寿丸を殺害したふりをして、匿かくまっていたのです。

もし松寿丸の命を助けたことが信長に知られれば、信長の怒りに触れて、この男が殺されたかもしれません。命を懸けて松寿丸を守った、その男の名は、竹中半兵衛。秀吉の前半生における名参謀です。ともに秀吉の軍師ぐんしとして知られる二人は、互いの才能も人間性も知り尽くし、これほどの信頼関係で結ばれていたんですね。

半兵衛は、自分の一存で松寿丸を生かすことで、結果的に、信長の面目を保つとともに、黒田家のピンチも救ったのです。

すべてを知った官兵衛は、息子の命を守ってくれた半兵衛に、心から感謝しました。けれども、その感謝の言葉は、半兵衛に届くことはありませんでした。官兵衛が有岡城から戻る前に、半兵衛は病気で亡くなっていたからです。

失敗に学ぶ

この村重謀反の一件は、それまで己の才能に頼り、自制のきかなかった官兵衛に、さまざまな教訓をもたらしました。この事件をきっかけに、官兵衛は、人を認め、自己を抑制することができるようになり、その結果、功名心を手放すことができたのだと思います。そのような官兵衛だったから、その後、秀吉の名参謀として活躍できたのではないのでしょうか。

それに、いつ死んでもおかしくないような過酷な状況が続く中で、官兵衛は、自分にとって家族がいかに大切かということを実感したのではないかと思います。官兵衛は、この時代の武将にしては珍しく側室そくしつを持ちませんでした。この時の経験が少なからず影響を与えているのではないのでしょうか。

ただ、官兵衛の場合、息子への愛情は、妻への愛のようにわかりやすいものではありませんでした。官兵衛には、教育者的な側面があるのでしょう。才能のある子どもや若者を愛し、わが息子だけをかわいがるといった素振りそぶりは見せませんでした。

有岡城から命からがら戻った時、息子の死を聞かされ、悲嘆にくれた官兵衛。その息子が実は生きていたことを知り、あれほど喜び、恩人である半兵衛や天に感謝したわけですから、官兵衛も、本心では、息子を心から愛していたのだと思います。

でも、父親の息子への愛情というのは、母性とは違い、多くの場合、ストレートには表現されません。とくに、豊臣政権下で大名となった官兵衛にとって、息子への愛情と「家」を守ることは、同じ意味を持っていたのではないのでしょうか。つまり、生身の父親として息子に感じる愛情と、家を守っていく責任が、混然一体となっていた……。

父親は、息子を愛おしいと思いつつ、つい黒田家の跡取りとして、十分な資質が備わっているかをチェックしてしまう。才気煥発さいきかんぱつな官兵衛だけに、自分と比較して、息子の至らないところが見



文禄2年8月9日付 黒田如水自筆覚書(福岡市博物館蔵)

息子長政に宛てた自筆の遺言状。当時官兵衛は朝鮮陣で受けた秀吉の勸気により賜死の可能性があり、有岡城幽閉に匹敵する生命の危機にあった。そのような中、秀吉や豊臣秀次に忠誠を尽くせば、神に祈る必要はないと記している。

えすぎてしまう。すると、男同士、微妙な心理が働き、それが息子にも伝わる。

戦国の世のならいとはいえ、官兵衛は若い頃から戦陣に継続していたので、父子が一緒に過ごす時間は想像以上に短かったでしょう。さらに、一城の主となるような武家の跡取りには、帝王学を身につけさせるために幼い頃から養育係がつけられ、親子といえども距離感がありました。そのことも、親子関係に影響を与えたのかもしれない。

松寿丸にとって、父・官兵衛は、甘える対象ではなく、憧れであり、誇りであり、同時に、越えなければいけない壁であり、しかし決して越えることのできない壁……そんな存在だったのではないのでしょうか。

自らの才覚で、大名に上り詰めた官兵衛でしたが、名参謀として秀吉の天下獲りを支えたわりには、彼に与えられた所領は、十二万五千石(諸説あり。太閤検地後十七万石とも)というわずかなものでした。しかも、場所は、大坂から遠く離れた豊前(現在の^{おわた}大分県と^{くわくわ}福岡県の一部)。

この処遇は、秀吉が官兵衛を過小に評価してい

たからではありません。実際、秀吉は、誰よりも官兵衛の才覚と智謀を高く評価していたのです。評価していたからこそ、官兵衛を恐れたのです。彼に、その功績に見合った大きな所領を与えれば、天下人である自分の立場を脅かす存在になるでしょう。

その秀吉の心の機微を察した官兵衛は、天正十七(一五八九)年に隠居し、家督を嫡男・長政(松寿丸の元服後の名前)に譲りました。後に、官兵衛は自らを「如水」と称するようになりますが、この「如水」という名に、官兵衛の心情が表れているような気がします。「自分の心は澄んだ水の如し、一点のやましきもない」と、秀吉に言外に伝えたかったのではないのでしょうか。

隠居後も、官兵衛は秀吉の側近として仕え続けました。天正十八(一五九〇)年、天下統一の最終局面・小田原攻めの折には、秀吉に請われ城主の北条父子の説得にあたり、小田原城開城に成功しています。

如水は官兵衛が何よりもこだわったのは、地位でも財産でもなく、人生という最高の舞台で、自分の才能を思う存分発揮して自己表現することだったのでしょう。

相反したそれぞれの大活躍

彼の一人息子・長政は、父親のように、将としての天性の素質やカリスマ性に恵まれていたわけはありませんが、非常に堅実な性格で、立派な跡継ぎに成長していました。偉大な父親の影で悩み、苦しみ、家運の衰退を招いてしまう二代目が多い中で、長政は大名たちから一目置かれる存在で、その実力は大いに認められていました。

でも、おそらく当の長政は、ほかの誰からも認められなくていいから、たった一人の人に認めてほしい、褒めてほしいと思っていたのではないのでしょうか。長政にとって唯一無二の存在、それが官兵衛だったのではないかと思うのです。長政は、松寿丸と呼ばれていた子どもの頃のように、ひたすら父に憧れ、父から認められたいと願っていた……。私にはそんなふうに見えて仕方がないのです。

秀吉が亡くなると、長政は、父親譲りの分析力を発揮し、徳川家康こそが次の天下人として、さわしいと判断し、家康に接近します。

関ヶ原の戦いの折には、石田三成に敵意を抱く豊臣恩顧の大名たちを家康の元に結束させ、さ



黒田長政像(重要文化財 福岡市博物館蔵)



黒漆塗桃形大水牛脇立兜(重要文化財 福岡市博物館蔵) 撮影者：藤本健八

らに西軍の小早川秀秋の裏切り、毛利家重臣・吉川広家の内応を取りつけています。ここでも長政は、父親譲りの政治力、交渉力を発揮しました。そして、完璧なる根回しで、家康の天下獲りをお膳立てしたのです。

関ヶ原の戦いは、家康率いる東軍が勝利を収めました。よく、天下分け目の関ヶ原といわれますが、関ヶ原の決戦自体は、わずか一日で勝敗が決しています。

なぜこれだけ短時間で決着がついたのか。理由はいろいろあるでしょうが、その最大の理由を一つ選ぶとしたら、私は迷わず長政の政治力を挙げたいと思います。家康もそのことをよく理解していたから、関ヶ原の戦いの後、筑前(現在の福岡県の一部)五十二万石の大大名へと、黒田家は大幅な加増を受けたのでしよう。

勝利を収め天下を手中にした家康は、長政の働きに心から感謝し、長政の手をとって厚く礼を述べたそうです。

「国許にいる父上も、きっと喜んでくれる」

長政は、父親に褒められる自分の姿を想像し、意気揚々と帰国したのではないのでしょうか。そし

て、関ヶ原の戦いで自分がいかに活躍したか、そのことに家康がどれほど感謝してくれたかを、得意げに如水に報告したはずです。

「よくやった」

ただその一言を聞きたいという思いが、長政の原動力だったと思うのです。

ところが、長政の意に反して、如水は不機嫌でした。なぜなら、関ヶ原の戦いは、如水にとって千載一遇のチャンスであり、そのチャンスを逃すことになった最大の原因が、息子・長政の活躍にあつたからです。

石田三成の挙兵を知ったとき、如水は自分の内につつと情熱がわき上がってくるのを、抑えきれなかったのではないでしょう。秀吉の天下獲りを支えた如水に、ついに自分のために才能を使うチャンスがめぐってきたのです。この時、如水五十五歳。おそらくこれが彼にとって、最後のチャンスとなるでしょう。

豊前・中津に隠居中の如水は、「関ヶ原で東西両軍が争う隙に九州全土を占拠し、東上して関ヶ原の勝者を倒す」という戦略を立てました。そして、家康についた長政と足並みを合わせるように、自らも家康につき、九州で挙兵する意思を

示し、家康に認められました。といっても、黒田軍の主力は長政に率いられ、関ヶ原に出陣しているので、如水は長年蓄えた金銀を領民に与え、九千人ほどの速成軍を作ったのです。

言ってみれば、彼らは戦いの素人です。でも、そんな彼らを束ねるのは、人心を掌握することに長け、しかも戦では負けた記憶のない如水です。彼らは、如水マジックにかかり、連戦連勝、瞬間に九州北部を制圧していききました。

数万に膨れ上がった軍勢で、このまま九州を席卷し、関ヶ原の勝者に決戦を挑もう……そんな彼の壮大な戦略は、突然崩れ去りました。関ヶ原の戦いが、たった一日で終わってしまったからです。

「関ヶ原の戦いが、あと数カ月続いていたら……」。たとえ自分がその後戦いに敗れ天下を獲れなかったとしても、天下を狙うという夢をみることはできた。そして、その天下を分ける大戦で、自分の才能と運を思う存分試すことができたのです。

その千載一遇のチャンスを潰したのが、皮肉にも息子だったとは……。武将としての器、才能という点では、自分の足元にも及ばない息子が、自分の夢を砕いたのです。歴史とは、なんとドラマ

ティックなのでしょう。

天下を夢見た父と、家の安泰と発展を願った息子。初代と二代目の気質の違いが表れたのかもしれない。

最後までできること

如水の魅力は、これ以降、天下に対する未練をきっぱりと断ち切り、風雅な文化人として余生を送ったことです。そして関ヶ原の戦いから三年半が過ぎた慶長九（一六〇四）年春に、京都伏見藩邸で亡くなりました。数え年五十九歳でした。

これは、如水の晩年のエピソードです。

つねに人に対して寛容だった如水が、急に愚痴っぽくなり、人が変わったように短気になって、周りの者に対して怒りちらすようになったそうです。

困った家臣が、それとなく長政の耳に入れました。父の変貌ぶりを聞いた長政の胸中には、ふと寂しさがよぎったのではないのでしょうか。武将として必要なあらゆる才能に恵まれ、人の心を見抜くことにも長けていた父。あれほど家臣の尊

敬を集めていた父が、このように家臣に疎まれるようになるなんて、年齢には勝てないということか……。

家臣をあまり困らせないように、父をたしなめるために会いに来た長政。その息子に、如水は一喝しました。

「お前のためにやっているということが、なぜわからぬ!？」

長政があつと思ひ、父を見上げると、そこには、戦国史の一ページを彩った往年の軍師の顔はなく、父親としての慈愛に満ちた表情がありました。

有岡城で危うく命を落としたことが、如水の人生にとって最大の危機でしたが、実は、それに勝るとも劣らないような深刻な危機が、如水を再び襲おうとしていたのです。その危機とは、やがて訪れるであろう、自身の死、そしてその後の黒田家の存亡です。

黒田家の家臣たちは、表面上は息子の長政に従っていましたが、家臣たちが本当に尊敬しているのは、自分であることを、如水は知っていたのです。その自分が死んでしまつたら、老臣たちは、二代目の長政を俣り、長政では家臣団を抑えるこ

とができなくなるのではないか。あるいは、自分の後を追つて、優秀な家臣たちが殉死しないとも限らない。そうなれば、黒田家は最大の危機を迎える……。

近い将来、必ずやってくるその危機に対して、布石を打つことが、如水に課された最後の使命でした。如水は、その使命を果たすために、心を鬼にして、家臣たちにつらくあたっていたのです。

自分に向けられる父の眼差しを見て、長政はすべてを悟りました。如水の家臣に対する心ない振る舞いは、乱心したわけではなく、年をとつて耄碌したからでもなく、自分の死後、長政が家中を治めやすくなるように、わざとしているのだということを。

自分が嫌われれば、相対的に家臣の長政に対する評価が上がるので、老臣たちも長政を心から慕い、支えるようになるだろう。同時に、自分が嫌われることが、家臣の殉死を防ぐことにもなるだろう。そう考えた上で、如水なりに最善の策を講じたのだということ。

この時の如水の決断は、秀吉に授けたどの策よりも、また関ヶ原の戦いの折に天下を狙って立て

た不敵な戦略よりも、如水らしく輝いているように、私には思えます。息子を思う深い愛情の中に、策士としての才能がきらりと光っているところが、いかにも如水らしいのです。

愛する息子のために、自らが悪者になることを選ぶ……そんな危機の乗り越え方もあるんですね。



牡丹芍薬公園(舞鶴公園内の黒田如水住居跡の周辺は公園として整備されている)



潮見櫓(福岡城の城跡の大半は舞鶴公園となっている)

▶ 出典

『感動する! 日本史』

著者: 白駒妃登美
中経出版

如水の策は見事にあたり、彼が心から愛した息子・長政は、如水の死後も、五十二万石の黒田家を立派に切り盛りしていきます。

それにしても、こんなにも父親から愛されていたことを知って、長政はどんなにか幸せだったことでしょう。殺されたと思った松寿丸が、生きていたと知った時、息子の無事を心から喜び、恩人に感謝した官兵衛。松寿丸が大人になって長政となっても、父の息子への愛情はあの時のままだったのです。

武将としての才能を認めてくれなかった父。でもその父が、本当は無条件で自分を愛してくれていた……。その愛を感じることができた時、長政がそうであったように、子どもは自分の足で自分の人生を歩みはじめるのかもしれない。

【無断転載禁止】